

推薦入試合格者への入学前学習に関する教育的実践 (1)

—改善に向けて—

川原 誠司・石川 隆行・宮代こずゑ・久保田愛子

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第7号 別刷

2020年8月31日

推薦入試合格者への入学前学習に関する教育的実践 (1)[†] —改善に向けて—

川原 誠司*・石川 隆行*・宮代こずゑ*・久保田愛子*
宇都宮大学共同教育学部*

今回の一連の論文は、宇都宮大学共同教育学部教育心理分野の推薦合格者に対する入学前学習のあり方を改善する実践報告である。本稿では、推薦入試に関する実状や本分野で改善を図る理由、実際の入学前学習支援についての内容や方法、スケジュールなどを報告するものである。これらを基に次報以降の報告がなされている。

キーワード：推薦入試，入学前学習

1. 推薦入試の現状と課題

(1) 推薦入試という方式の定着

現在の大学入試において、推薦入試というのはほぼ全ての大学でもおこなわれている方式として定着しており、その経緯や現状の分析もある（中村，1996；次橋，2019）。

文部科学省（2019）の「平成30年度国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」によると、平成28年度～平成30年度での国立大学法人において推薦入試の実施大学の割合は95.1～96.3%、実施学部の割合は71.6～73.2%、入学者数の割合は、12.1～12.2%となっている。私立大学においては入学者数の40%超にもなっている状態である。

本学部においては、令和2年度の推薦入試方式の募集人数は、推薦 I A 入試32名、推薦 I B 入試20名の計52名であり、合わせると学部定員170名に対して約31%となっており、前記の統計値を踏まえても推薦合格者の割合がかなり高くなっていると言えよう。したがって、推薦入試に対しての適切な周

知や選抜方法、有用な学生の確保は本学部においても重要な課題である。

(2) 推薦入試合格者に対する否定的見方

多くの大学で定着している推薦入試方式ではあるが、歴史的に見ても懐疑的な見方は存在してきた（中村，1996）。その合格者に対しては非常に冷ややかな見方がなされていることがある。それが合格時点だけでなく、大学最終学年の就職活動に際しても選ぶ企業側が問題視しているかのように扱っていることを感じさせる論文や記事も多い（平野，2011；高木，2016）。合格時点前の高校の進路指導においても、一般入試合格が困難な場合にAOや推薦入試を利用する、と回答した高校の割合が4割近く見られた調査結果もある（井上，2014）。

第1筆者の経験においても、大学の授業の課題遂行を忌避する者の中で、あるいは就職活動の失敗について語る者の中で「自分は推薦だから……」という言い方をする者がいて驚くことがある。「一般入試を受けていない」ということが、他者から不当に蔑視されるイメージを持たれるどころか学習の遂行時や評価の際の自己弁護としても存在している部分があることを懸念する。

否定的な見方に関する前述のような記事からは、一般入試合格組のような入試を経た合格者に比べてしっかり学んでいない、加えて学習時間が十分とは言えないというような「学力の不十分さ」への疑義、推薦入試で安全なところを早期に決めてしまいチャ

[†] Seishi KAWAHARA*, Takayuki ISHIKAWA*, Kozue MIYASHIRO* and Aiko KUBOTA*: Educational practices in pre-admission studies for students selected by recommended admission (1) : For the improvement

Keywords: recommended admission, pre-admission studies

* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University
(連絡先: kawahara@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

レンジしていないというような「姿勢」への疑義、早めに決定すること（してしまうこと）でその後の学習への苦勞がないというような「意欲」への疑義といったものが取り上げられることが多いようである（佐藤，2011；大嶽・高野・小嶋，2010）。

(3) 入学前学習支援の必要性

前述のような推薦合格者に対しての否定的な見方が様々になされるが、大学としては自らの判断で最終的に合格と認定した以上、その学生たちを育てなければならぬ。大学側が推薦入試合格者に対して不十分だと感じることもあるとすれば、それに見合った教育を施す責務があるということである。そこには高校側の高い意識も必要になると筆者らは感じるが、高校教員を対象にした山岡（2015）の調査においては、調査対象者183名中「大学が主となって行くべき」と回答した者が102名であり、「高校が主体」の12名、「高校と大学の両方」の68名に比べ圧倒的に多かった。多忙な学校の実状を鑑みたときに、「（これからの受験時期に向けて）合格の決まった生徒まで綿密に指導することは難しい」といった現実が立ち塞がっているように思える。

合格者に対する教育の中で一般的におこなわれているのは、推薦合格が決定してから大学入学までの間に合格者に対して大学側が課題を出して学習を求めるものである（樋口，2014）。本稿ではこのことを「入学前学習支援」と呼ぶこととする。多くの大学で入学前学習支援に関する努力や工夫がおこなわれている。保育者養成の短期大学で読書、レポート、保育所調べを課したもの（太田・松田，2011）や看護師養成の大学で生物や計算に関する課題、授業体験でのノートテキングや在学生との交流などを課したもの（林他，2015）など、多様な報告がある。

(4) 本学部の入学前学習支援の現状と問題点

入学前学習支援については本学部でもおこなわれている。しかし、現在の設定基準として学部内で要求されているのは、12月下旬～3月の間に2回の課題を実施し、郵送でやりとりするというものである。当然この基準よりも充実させてもよいが（実際、第1筆者が以前に所属していた総合人間形成課程ではe-Learningを使用してより回数が多い入学前学習支援をおこなっていた）、多忙化の一途の大学の職務において、センターのような機能的部署が無い場合

には、その部分にはなかなか改善の手が入りにくい。

しかし、この部分を充実させなければ推薦入試合格者に対して懸念される否定的な部分の改善は難しいだろう。「学力が保たれていない」ということであればそれを十分に補う支援が必要だし、「否定的な姿勢や意欲」ということであればそのことを考えるように促す支援が必要だろう。その働きかけをせずに、推薦入試合格者に否定的な印象を単に持ったり、批判のみし続けたりすることは、合格させた側としては責任放棄ではないだろうか。

加えて、筆者らが所属している教育心理分野においては、教員志望や就職に関する問題もある。教員就職率向上が学部ミッションになっている現在、教科によらない当分野では入学当初から教員志向でない合格者も散見される。これは推薦合格者でも見られるようである。このあたりの課題は高校の進路指導の改善にも十分期待したいところだが、分野においても学校教育や教員についての関心や使命感といったものを入試時のみならず推薦合格者ならば早めに醸成する必要があると思われる。

以上のことを踏まえて、今回、教育心理分野独自で入学前学習支援の充実を図り、実践した。本稿を踏まえて、第6報までおこなわれる一連の論文においては、その実践の説明や振り返りをおこない、今後のよりよい入学前学習支援に向けての一步を踏み出そうとするものである。

2. 教育心理分野における今回の改善策

前節のような問題意識に対する改善を模索するために、教育心理分野ではX年度の当分野の推薦ⅠA入試の合格者3名に対して、学部が求める基準よりも充実させて以下のような入学前学習支援を計画・実施した。

(1) 継続的な学習支援計画

本分野ではまず、合格後から3月上旬までに週1回程度で課題を提出してもらい、継続的に学んでもらうようにする計画を考えた。現状の2回設定では課題の大きさの程度はあるが、継続的におこなわれているとは言い難い。当然、推薦合格者には高校の授業そのものもまだ残っているかもしれないが、高校3年生の1月以降の受験時期に質・量ともに推薦合格者に対する十分な学習指導が高校でおこなわれることは、残念ながらあまり期待できない。

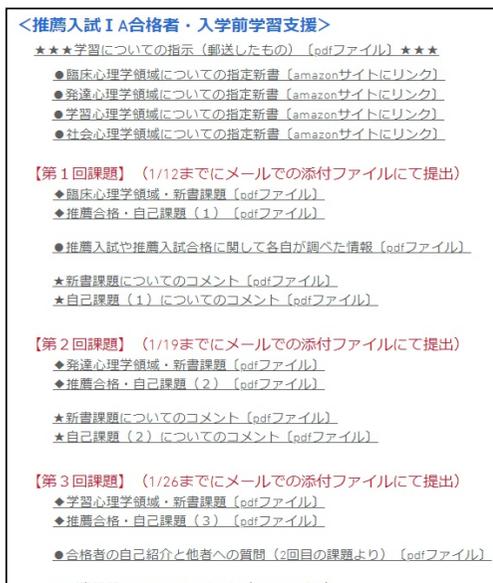


図1 分野ホームページ上の課題やコメントの掲示画面

なお、合格者の課題確認や提出に際しての負担を減らすために、分野ホームページ上で課題やコメントを呈示し（図1参照。この画面はパスワード設定がなされ、当事者しか閲覧できない）、課題提出は電子メールの添付ファイルでおこなった。また、郵送でのやりとりが必要なものについては、返送先ならびに切手を貼り付けた封筒（封緘用の両面テープも貼付済）を用意した。

スマートフォン全盛の連絡手段である世代に対して、電子メールを使用してもらったり、ワープロソフトで文書作成してもらったりすることは、入学後の学習への円滑な移行につながると思われた。

(2) 学習内容の3つの柱

1) 専門性の導入（新書課題）

教育心理分野という専門内容、教員養成の学部という使命を踏まえ、分野の4名の教員の専門領域である「臨床心理学」「発達心理学」「学習心理学」「社会心理学」についての各図書を読んでもらい（価格的にも読解的にも負担の少ない新書を指定した）、個々の教員が設定した課題に回答してもらった。

2) 自己分析とつながりの形成（自己課題）

推薦合格者に関するイメージ把握やリーダーシップ、主体的な学び等に関して、1000文字程度の教員側作成の文章を読んでもらい、それに付随した自己分析の課題を出し、おこなってもらった。また推

薦合格者同士の自己紹介や相互質問なども行った。さらに、それまで行った自己分析課題をもとに、教員側で形式・分量を指定しながらポスター形式にまとめてもらった（最終的な成形や印刷等は教員側で行った）。そのポスターを2020年2月12日に教育心理分野で実施された卒業論文最終ポスター発表会の会場に同時掲示し、参加した在学生（合格者にとっては先輩）に応援メッセージを記入してもらった。

3) 知識の向上（知識問題演習）

今回の入学前学習支援と同時期に実施された大学入試センター試験を実際に解いてもらい、その解答状況ならびに点数を報告してもらった(Excelフォーマットを送付し、解答状況を報告しやすいようにした)。その後、教員採用試験の一般教養試験問題を3週に分けて実施した。復習を合わせ、1週間あたり10時間程度の学習時間を見越した設定である。

(3) 実際のスケジュール

前項で述べた学習内容をもとに、週に1回の間隔を目安に表1のように進行した。合格対象者には12月下旬に初めて連絡し、電子メール等の取得依頼や分野ホームページ上での課題呈示を行うことを伝え、1月はじめに第1回課題を始めてから、推薦合格者が最終課題を出し終わったのは3月上旬、知識問題演習の復習まで終えたのは3月中旬であった。

表1 実際の入学前学習支援の経過

●第1回	・新書課題（1）－臨床心理学領域－ ・自己課題（1）－推薦合格者のイメージに関して－
●第2回	・新書課題（2）－発達心理学領域－ ・自己課題（2）－自己紹介と関係づくりに関して－
●第3回	・新書課題（3）－学習心理学領域－ ・自己課題（3）－リーダーシップに関して－
●第4回	・新書課題（4）－社会心理学領域－ ・自己課題（4）－積極的な学び方について－
●第5回	・自己課題（5）－掲示発表の準備－ （分野の卒業論文発表会の際に掲示） ・センター試験問題の解答
●第6回	・知識問題演習（1）
●第7回	・知識問題演習（2）
●第8回	・知識問題演習（3）

3. 次報以降の意義や効果の分析に向けて

(1) 分析の材料

次報から実際の学習についての詳細な説明や実際の学習状況、合格者の感想について検討していく、そのために「合格者が実際に課題に解答した内容」と「入学前学習支援が終わった段階で実施した質問紙調査」を分析の材料として用いる。質問紙調査については、表2のようなものを自由記述で求めた。

(2) 倫理的配慮

前項の(1)に関して、質問紙調査の依頼時に合格者にメールで説明し、同様に質問紙調査の1ページ目にも記載し、同意を取るように配慮した。記載した内容は「回答は任意であり、提出の有無が大学入学後の対応に影響しない」「合格者個々の良し悪しを評価するために利用するものではない」「利用にあたり、個人が特定されるような情報については削除や曖昧化をおこなう」「本来は無記名回収が理想だが、提出の負担を避けるためにメール提出の形にするが、どのような回答でも不利益は生じない」といった旨を説明して、同意を得た。

表2 質問紙調査の項目

-
- | | |
|----|---|
| A. | 課題の中の「新書課題」についておききします。課題を行ってみて、どのようなこと（新書の内容や課題内容、遂行の良し悪しなど）を感じたり、考えたりしましたか。 |
| B. | 課題の中の「自己課題」（最終的な発表掲示作業を含む）についておききします。課題を行ってみて、どのようなことを感じたり、考えたりしましたか。 |
| C. | AやBとも関連しますが、「同じ合格の立場の仲間との質疑応答」「教員からのコメント」「先輩からのコメント」など本課題における他者とのつながりを通して、どのようなことを感じましたか。 |
| D. | 課題の中の「知識問題演習」を行ってみて、どのようなことを感じましたか。 |
| E. | その他、今回の入学前学習支援について感じたことがあればお書きください。 |
-

引用文献

林 世津子・富岡 晶子・島田 祥子・嶋澤 奈津子・高野 海哉・原田 竜三・宮本 千津子 (2015). 東京医療保健大学医療保健学部看護学科における入学前教育プログラムの効果 東京医療保健大学紀要, 10, 23-28.

樋口 健 (2014). 今日の入学前教育——推薦・AO

入試に伴う学習面の接続対策の実態と課題——VIEW21 大学版, 2014 Vol.4 Winter, 20-23. Retrieved from https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/VIEW21_dai_2014Winter-2.pdf (2020年3月30日)

平野 恵子 (2011). 企業からみた学力問題——新卒採用における学力要素の検証—— 日本労働研究雑誌, 614, 59-70.

井上 敏憲 (2014). AO・推薦入試に関する高等学校の指導と高校教員の意識 愛媛大学大学教育実践ジャーナル, 12, 73-78.

文部科学省 (2019). 平成30年度国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要 Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/03/1414952.htm (2020年3月30日)

中村 高康 (1996). 推薦入学制度の公認とマス選抜の成立——公平信仰社会における大学入試多様化の位置づけをめぐる—— 教育社会学研究, 59, 145-165.

太田 裕子・松田 知明 (2011). 短期大学の保育者養成課程における入学前教育の検討 羽陽学園短期大学紀要, 9, 97-107.

大嶽 紀子・高野 春香・小嶋 明子 (2010). 心理学部新生の志望理由による、入試形態と入学満足度の比較 日本教育心理学会第52回総会発表論文集, 470.

佐藤 美津子 (2011). 大学入試の多様化と学力格差——4 年制私立大学を中心に—— 多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要 (Bulletin), 3, 81-92.

高木 幸司 (2016). “大学は推薦入学”の新入社員は使えない、は本当か ダイヤモンド・オンライン (WEB記事) Retrieved from <https://diamond.jp/articles/-/88957> (2020年3月30日)

次橋 秀樹 (2019). 大学推薦入試の展開と現状——現代における推薦入試の類型化試案—— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 65, 331-343.

山岡 憲史 (2015). 接続教育支援センターにおける入学前教育の到達点 立命館高等教育研究, 15, 55-71.

令和2年4月1日 受理

Educational practices in pre-admission studies
for students selected by recommended admission (1) :
For the improvement

Seishi KAWAHARA, Takayuki ISHIKAWA, Kozue MIYASHIRO and Aiko KUBOTA